

平成28年度第1回総合教育会議 会議録

- 日 時 平成28年7月22日(金) 午前10時30分
- 場 所 市役所本庁舎5階 全員協議会
- 出席者 新潟市長  
篠田 昭  
教育委員会  
教育長  
前田 秀子  
委員  
吉村 正史, 齋藤 洋一郎, 沢野 千英子, 織田 絹子,  
伊藤 裕美子, 藤田 政子, 上田 晋三
- 事務局出席者 市長部局  
地域・魅力創造部長 高橋 建造, 政策調整課長 野坂 俊之  
教育委員会事務局  
教育次長 高島 徹, 長浜 裕子, 教育政策監 高居 和夫,  
教育総務課長 山本 正雄
- 関係課等出席者 市長部局  
中央区副区長 中川 高男, 新潟暮らし奨励課長 佐藤 薫  
選挙管理委員会事務局  
次長 小林 和幸  
教育委員会事務局  
地域教育推進課長 佐々木 克己, 学校支援課長 大井 隆
- 議 題
- (1) にいがたへの愛着を育む教育について
  - (2) 18歳選挙権の実施にあたって
  - (3) その他

## 第1 開会

### ○事務局（地域・魅力創造部長）

皆様、おはようございます。定刻となりましたので、これから平成28年度第1回総合教育会議を開会いたします。

私は、冒頭の進行を務めさせていただきます、地域・魅力創造部長の高橋でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づきまして、昨年度から開催しております。これまでの3回の会議におきまして、「学力・体力に自信をもち、世界と共に生きる心豊かな子ども」、「生涯を通じて学び育つ、創造力と人間力あふれる新潟市民」、これを目指す姿といたしました教育の大綱を策定するとともに、進展する人口減少を克服し、地方創生に向けて策定した新潟市まち・ひと・しごと創生総合戦略の推進に当たり、教育委員会との連携、教育現場での取組みなどにつきまして、ご議論いただきました。

本日は、お手元の次第のとおり、にいがたへの愛着を育む教育について、また、新たに施行された18歳選挙権の実施にあたって、この二つを議題としてご用意いたしております。

それでは、ここからは市長に議事進行をお願いいたします。

## 第2 議案

### ○市長

それでは、よろしくお願いいたします。

本日は佐藤委員がご欠席です。

それでは、議題1、にいがたへの愛着を育む教育について、教育委員会と市長部局の連携の重要性が増す中、教育委員会、市長部局、それぞれが取組みを進めております。これまでの実績について、事務局から説明をお願いします。

### ○地域教育推進課長

それでは、教育委員会の事業から説明させていただきます。地域教育推進課です。

資料1の1ページをご覧ください。地域と共に歩む学校づくりの中核を担う地域と学校パートナーシップ事業です。現在、すべての市立小中学校、中等教育学校、特別支援学校で実施しています。資料にあります、学校が元気に！ 地域が元気に！ 子どもが元気に！ は、このパートナーシップ事業の目指す姿を表す言葉です。事業が始まり、今年で10年目を迎えましたが、学校にとっては多様で特色のある学習活動が展開されるようになりました。地域にとっても、住民同士の交流の場、子どもとのふれあいの場となり、学校や子どもに役に立っている、住民同士の結びつきが強くなったという声をいただいています。また、たくさんの皆様からかかわっていただくことで、子どもたちの学力向上、社会性の育成、

自己肯定感の高まりについて、大変よい結果へとつながっています。今後は、拡大から持続へと方向性を打ち出し、事業の質的な充実を図っていく予定です。例えば、地域教育コーディネーターの複数制を奨励し、多様なニーズに対応できるようにします。また、学校、社会教育施設、地域団体が協働できる環境づくりを一層進めていきます。さらに、事業の周知を図り、たくさんの市民から協力が得られるようにしていきます。

2 ページ目は地域と学校ドリームプロジェクト支援事業です。今年度は、小学校34校、中学校11校を認定いたしました。この事業の目的は、地域と共に歩む学校づくりのさらなる推進を図るために、学校が積極的に特色のある取組みを続けたり、新たな取組みを開発できるようにということです。上段左側の写真は、地域の納涼大会に子どもたちも実行委員として運営にかかわっている様子です。右側の写真は校庭の桜を地域の交流のシンボル、交流と絆を深めるシンボルとして、食育やキャリア教育に取り組んでいる様子です。今年度はこのドリームプロジェクト支援事業を実施したすべての学校がウェルカム参観日を行います。各学校の優れた取組みを知り、事業の一層の推進を図るとともに、地域や区内外の皆様からもご参加いただくことで、この事業をたくさんの市民の皆様にも周知できるよう、各校がそれぞれ創意工夫した参観日を計画しています。

3 ページをご覧ください。ふれあいスクール事業です。ふれあいスクール事業は、市内66の小学校で行われています。この事業のねらいは、子どもたちの安心・安全な居場所づくり、地域の大人と子どもとのふれあい、異年齢交流、地域、家庭の教育力の活性化の3点です。平日の放課後や土曜日の午前中にPTAや地域の方が運営ボランティアになり、自由遊びを中心とした身体活動や工作、囲碁将棋などの文化活動、また宿題などの学習支援を行っています。また、お泊まり会や餅つき大会などのイベントや、地域の芸能を教えていただいているふれあいスクールもあります。

今後は、土曜日の教育プログラムを整備し、地域の教育力を生かした学びの場、ふれあいの場を提供できるようにしていきます。また、放課後児童クラブとのさらなる連携を深め、両方で連携してよりよい居場所づくりに努めていきます。

4 ページをご覧ください。アグリ・スタディ・プログラムは、日本初の公設教育ファームであるアグリパークやいくとぴあ食花、学校教育田などで体験学習を行うためのプログラ

ムです。農作物を育てる学習と消費する学習で子どもたちの心と頭を耕そうというもので、専門家からの指導もいただきながら、五感を使って学んだり、命を大切にしたり、人との絆を大切にしたりすることを学ぶ中で、新潟の農業と食のすばらしさを実感し、ふるさと新潟を愛し、誇りに思う子どもの育成を目指しています。

○市 長

続いて、中央区。

○中央区副区長

中央区副区長の中川です。どうぞよろしく願いいたします。

私から、地域と学校が連携した地域活性化についてご説明させていただきます。市長部局におきましては、主に各区役所において区づくり事業もしくは地域活動補助金などを活用するなど、さまざまな手法で地域の活動を積極的に支援しており、その事例も数多くあります。地域が自ら行う地域活性化に向けた取組みにおきましては、地域と学校が連携して活動を行うことで事業の効果が高まるとともに、子どもたちが活動にかかわることで地域への愛着を育むきっかけにもなっています。

今回は、会議が中央区での開催ということですので、私から、ほかの区の事例も交えながらいくつかご紹介させていただきます。

資料2をご覧ください。一つ目の事例です。中央区の区づくり事業として、平成25年度から実施している事業です。これは平成18年に解体されました市営汐見台住宅跡地の活用について、平成22年に中央区自治協議会からの提案を受けたことをきっかけとして、区で検討委員会を組織し、その検討委員会からの提言を受けて始まった事業となっております。コミュニティ協議会、小学校、中学校ほか新潟大学、NPO法人等地域の団体など、多くの方々の協働によって実施している事業でして、クロマツの植樹などの体験活動を通じて、子どもたちに海岸林が地域の大切な財産であることなどを理解してもらい、併せて、地域に愛着を持ってもらうということを目的とした事業です。

次に、秋葉区が地域活動補助金により地域活動を支援している事例です。この地域活動補助金ですが、コミュニティ協議会やNPO法人、自治会などが地域課題の解決のために行う取組みに対して補助を行うものです。この事例は、新関コミュニティ協議会が作成いたしました、しんせき夢マップという地元の宝物を紹介したマップを活用した事業です。コミュニティ協議会が新関小学校と連携しまして、毎年、地域の

歴史、文化を地域の住民の方々から教わるという地域学習を展開しているということです。

次の事業は中央区の沼垂小学校区コミュニティ協議会が主催するさくら祭りの事業です。沼垂地域は中央区の中でも地域の絆が強いところでして、小学校や幼稚園、中学校と連携して毎年さくら祭りを開催しています。沼垂小学校は、この祭りの場を総合学習の発表の場として活用しておりまして、主に栗ノ木川の環境をテーマとした発表が行われているという事例でした。

次に、西区の黒埼南まちづくりセンターオアシス事業です。こちらでも地域活性化のための活動が盛んな地域でして、黒埼南ふれあい協議会が中心となって、地域住民の憩いの場として施設を開放しているほか、黒埼南小学校や地区公民館と連携して、写真にもありますが、そうめん流しやスライムづくり、勉強会の実施などを行っております。結果、地域の子どもたちの思い出づくりや夏休みの集いの場にもなっています。また、特産の枝豆を活用いたしまして、都市と農村の交流イベントや、農業を継ぐ若者たちの交流の場としての、婚活なのですけれども豆婚会、新潟大学の留学生との交流など、さまざまな事業を通じて地域の活性化に取り組んでいるという事例です。

最後に、中央区の浜コミ合同演奏会です。これは浜浦地域にあります三つの学校とコミュニティ協議会が協働で実施しているもので、日本歯科大学の講堂を会場として毎年開催しております。運営はすべてコミュニティ協議会が行っておりますが、関屋中学校の吹奏楽部はこの演奏会を3年生の引退演奏として位置づけていて、地域に定着した演奏会として親しまれているところです。

以上、学校と連携した代表的な事例を紹介させていただきました。これらの活動に対し、区としても補助金の支給のほか、広報ですとかPR、看板作成、あるいは実際の運営に直接職員がかかわるといった具体的な支援も行っているところです。紹介させていただきました事例のように、地域団体が行う事業では、やはり学校とのかかわりが非常に重要な要素となっている事例が多くあります。交通安全ですとか防犯などをはじめ、さまざまな面で協力し合える関係が地域の活性化においても大切であると認識しております。私ども区職員としましても、各コミュニティ協議会との懇談会の開催や担当職員を配置するなど、地域の活性化に向けて連携に努めているところではありますが、教育現場の方々におかれま

しても、ぜひ、地域住民との関係を深め、これまで以上にお互いが協力して地域を活性化できるような関係づくりもお願いできればと思っております。

○市 長

ありがとうございました。

今、資料1、資料2で発表がありましたけれども、これに関連しまして、ご意見などいかがでしょうか。

○伊藤委員

最初にご説明がありました地域と学校パートナーシップ事業の連携と協働ということで、今年度から拡大から持続へと方向性を掲げまして、ボランティア数も今までは上り調子でしたが、その数や事業数の増加というよりは、それを精査し、また活動が持続するようということを実施されているようです。区のミーティングや中学校区ミーティングに行きますと、周知するための全戸配布などの広報活動、各地域で学校と連携した取組みをお知らせいただくということが、非常に効果があるなど今年も感想を持ちました。事業を持続するためにも、コーディネーターがいろいろ工夫なさって、活動の周知と声かけでご苦労されていることを中学校区ミーティングでも伺っているので、地域のものとしても関心を持っていきたいです。子どもたちのためというけれど、結果、自分たちのためにもなるということが、より多くの市民の人に分かっていただけるかと思いますので、持続という1単語ですが、やる内容に市民一人一人の関心があればこそその持続だと思っていますので、広報や事業周知の部分に注目していきたいと思えます。

○織田委員

伊藤委員がおっしゃったことは持続性を高めるには広報の工夫が大切というご意見だったかと思えます。私も、同じような感想を持っています。ウェルカム参観日の活用も地域の方への広報にとっても効果的かと思えました。地域の方が、ウェルカム参観日に学校に足を運んで来てくださることで、この事業についての理解をより深めてくださるのではないかとということを実感いたしました。昨年度からウェルカム参観日ということで、私もたくさんの学校に行かせていただいています。学校の近くで農作業をしておられた方から「学校にたくさんの方が続々と向かっていく姿が、とても頼もしく思えた。」という感想を耳にすることができました。そういう地域の方の学校への思いや支え方が、とても心強く思えました。

○市 長

ありがとうございます。

今、お二人からご意見をいただいて、せっかくいいことをやっているのだけれども知られていないというのが、けっこうまだ残念な状況があるというように、私も感じています。

地域教育コーディネーター、コミュニティ協議会と非常にうまく関係を作っていたいただいているところも多いのですが、若干、そこが希薄なところもまだある。そして、コミュニティ協議会自体の認知度が低いというお話が、まだ出るような状況で、自治協議会もそうなのですが、そのあたり、せっかくいいことをやっているものを大きく発信していくということも大事だと思うのですが、教育長、どうでしょうか。

○教育長

区だよりに載せたり、学校だよりに載せたりしても、やはり見に行かないかなという方も多いです。自治協議会などでは代表の方が集まっていますので、私が参加する際には、ぜひ、皆さんの団体の方や地域の方にも口コミで広げていただきたいというお願いをできるだけしていますが、こちらが一生懸命PRしているつもりになっても、なかなかあちこちで全然知られていない、届いていないとよく言われます。本当にいろいろなところで直接見ていただいたり、口伝えで広げていったりということも大事だと思います。ぜひ、コーディネーターも地域の方に直接PRしていただければと思います。

○市長

そうですね。アグリ・スタディ・プログラム、教育ファームについても、非常にユニークで、また効果も上がっている、完全に軌道に乗っていると思っているのですが、先日は、ケネディアメリカ大使からもアグリパークをご視察いただいたということで、非常に子どもたちもいい交流をやって、ケネディさんからも喜んでもらっていたのです。そのあと、マスコミからも、せっかくああいういい施設、いいプログラムをやっているのに、アピール度がいまいちではないかというお話をいただいて、これから文部科学省なども活用させていただいて、全国的に頑張っていきたいですというお話をしたところ、その質問をした新聞社の方から早速アグリパークのことを記事に書いていただきました。やはりマスコミの方から関心を持っていただき、報道していただくということも非常に、学校が取り上げられるというのは励みになりますし、我々にとっても、例えば、記者の方も変わられるわけなので、アグリパークに記者の方をご招待していくということも、今後、定期的にやっていくことも含めて考えていく必要があるかなと。

それから、中央区からの報告で、森づくりみたいなところに頑張っている例が出てきていますが、これについても、新潟市は基本的に森を作って何とか飛砂を防止して

きたという歴史があって、7月30日にはタモリさんが新潟の海岸の辺りをぶらぶらしたものが放映されると。プラタモリの中で新潟は日本一の砂丘都市だという話が出て、「新潟は“砂”の町!？」というタイトルになるそうなので、砂の町、町にして住めるようにしたのは、やはり木を植えたからなんだよねという、そういう辺りが番組でどこまで取り上げられるか分かりませんが、砂丘と松林というのは我々にしてみると一体のものなので、新潟の歴史というものをしっかりと子どもたちにも認識してもらえ、また、地域の方にもそういう歴史を踏まえて、我々は、今、こういうことをやっているのだということを、より理解していただく。そのようなこともこちらはやっていかなければいけないと感じています。

そういうことを感じていたら、昭和7年に新潟市の小学校教員会が郷土読本という本を出したのです。もちろん、前田教育長はご存じだと思いますが、それが復刻されました。蒲原宏さんの監修ということで、昔の人は随分いいことをやっていたね、えらいことをやっていたねと。地域のことをしっかりと学習する、それを教員会がまとめているという。本当に今よりよほど進んでいるのではないかという感じで。今日、その本を持ってくるのを忘れてしまったのですけれども、長浜次長、そういう復刻された本などを活用していくということも考えてくれませんか。

○長浜教育次長

すみません、そのお話は知らなかったもので、ぜひ。図書館には入っていると思うのですけれども。

○市 長

まだ入っていないのではないのでしょうか。できたてなので。

○長浜教育次長

学校でも活用できるような方向を考えてみたいと思います。

○市 長

一般の図書館はもちろんだけれども、学校図書館のうまい活用も考えてください。

ほかにいかがでしょうか。

とりあえず、進んでいいのでしょうか。今年度から新たな取組みが始まっているということで、新たな取組みについて、教育委員会事務局から説明をお願いします。

○学校支援課長

学校支援課です。にいがたへの愛着を育む教育の今年度からの取組～大好きにいがた体験事業～についてご説明いたします。

資料3の表紙をおめくりください。大好きにいがた体験事業は、これまでの新潟、これからの新潟を知り、体験することを通して確かな学力・豊かな心・健やかな体を育むもので

す。この事業で、子どもたちは地域で活躍する人々とかかわりながら学ぶことで、自分の住んでいる地域、すなわち新潟のよさを実感することができます。このように、自分の住んでいる地域のよさを実感した子どもたちは、新潟に対する誇りや愛着を持ち、新潟に貢献しようとするシビックプライドを身に着けていくこととなります。

この事業は、二つの事業から成り立っています。一つ目は、左側の大好きにいがたアクション事業です。この事業では、子どもが地域の人々とかかわりながら地域に貢献できることを考え、提案したり、実際に活動したりすることを通して地域のすばらしさやよさを実感していくことを目指しています。

二つ目は、大好きにいがた交流事業です。この事業は、大好きにいがたアクション事業で学習した地域のよさを、離れた区や地域の学校と交流することでお互いの地域のよさを知る学習活動です。修学旅行の際に他県の学校と交流の計画をしている学校もあります。この事業は、2ページのように小中合わせて30校を推進校として、現在、推進しているところです。

これからいくつか例を紹介したいと思います。3ページをご覧ください。中央区新潟小学校は、子どもたちが地域とかかわりのあるNEXT21やどっぺり坂、古町芸妓、萬代橋、日本海と夕日などについて学び、それらを古町商店街の人々とともに古町スイーツとして表現して販売することを通し、古町の活性化に貢献できたことを実感することを目指しています。

4ページ目、秋葉区小合中学校は、地元出身で琵琶湖周航の歌を作曲した吉田千秋について学習し、パンフレットを作ってアグリパーク、道の駅、コミュニティセンター等に置き、それらを広く紹介することで、吉田千秋についてさらに深く知るといえるものです。

5ページ目、南区白根小学校は凧合戦について調査し、その後、実際に凧を作成し、凧合戦に参加するということで、地域が誇る凧合戦の魅力を実感しました。

6ページ目、中之口西小学校では、校区の小林研業がスマートフォンの鏡面研磨で世界的に認められていることに着目して、その技術が世界に認められるようになった戦略を学んだり、鏡面研磨を体験したりすることで、地域にある世界的な会社の素晴らしさを実感します。

7ページ目をご覧ください。以上のような学習を推進校3

0校で実施し、その成果をにいがたきらっと発見ブックにまとめ、市内全小中学校に配布し、市内の魅力ある場所や人について、市内の児童生徒が共有することになっています。各学校とも、現在、それらの事業に基づいて推進しているところです。教育委員会としては、各学校を支援して、子どもたちの様子を見ながら検証していきたいと思っています。

○市 長

ありがとうございました。

次に、市長部局から。

○新潟暮らし奨励課  
長

新潟暮らし奨励課です。新潟暮らし創造運動ということで、説明させていただきます。

資料4をご覧ください。高志中等教育学校総合学習で6年生、いわゆる高校3年生を対象に行った講演の内容と、講演後に実施したアンケートの結果についてです。

まず、今回の講演の目的です。急激に進む人口減少、少子超高齢化に対応する持続可能なまちづくりを進めるための取組みの一つである新潟暮らし創造運動として、将来を担う高校生に本市の魅力を改めて認識してもらうこと、将来どこに住むのか、新潟市を選択肢の一つに入れてもらうこと、そして地方創生、難しそうな言葉ではありますが、生徒の皆さんにもできることがあるのだということを考えるきっかけにしてもらうことを目的に開催いたしました。

講演の内容についてです。資料4-1をお願いします。資料は当日の講演で使用したものになります。はじめに、地方創生を分かりやすく説明するために、人口減少が進展している状況と、人口減少が身近な生活にも影響が及ぶこと、そして地方の衰退は国全体にも及ぶ危機的な状況で、総合戦略などを策定して、国を挙げて地方創生を推進している状況をお話ししました。また、本市の子育て環境や、次のページになりますが、働く場として魅力的かということをも市民に聞いたアンケートの結果を例に、本市が他都市と比べて誇れる現状があるにもかかわらず、市民の方に伝わっていない状況があることも伝え、本市では、良いところを伸ばし弱点を克服して新潟暮らしの魅力を市内外にアピールする新潟暮らし創造運動を展開し、新潟市がいろいろな分野で選ばれていることを具体的な例で見させていただきました。資料では、農業特区をはじめ、次のページからG7農業大臣会合、レストランパス、東アジア文化都市、アーツカウンシルなど、さまざま示しています。

説明の最後には、これからも新潟市が選択されるために、行政だけでなく、市民、民間とともに魅力あるまちになるた

めの取組みや、個人でも魅力を発信することが大切で、あなたは新潟市代表という気持ちを持っておしゃべりすることなど、ほんのちょっとしたことが、たくさんの人に選ばれ、新潟市を元気にすることにつながることをメッセージとして伝えました。

次に、アンケートの結果についてです。資料4-2をご覧ください。講演終了後に、生徒の皆さんにお願いし、答えていただいたアンケートの結果です。わずかな時間の中で答えていただくため、設問は5分程度で答えられるように項目を絞ったものとししました。1ページ目です。①地方創生について理解できたか。②新潟暮らし創造運動について理解できたか。こちらの二つについて、できた、まあまあできた、あまりできなかった、できなかったの四つから選択していただきました。できた、まあまあできたを含めてほとんどの方が理解できたと答えています。

2ページ目をお願いします。希望する進学・就職先をお聞きしました。市内を希望する方40パーセント、市外は59パーセント、そして未定は1パーセントでした。隣のページです。進学、就職先を市外と選んだ方に、将来新潟市に戻りたいですかと聞いたものです。これには戻りたいが24パーセント、戻りたくない9パーセント、まだ決めていない67パーセントということでした。その下は、④で答えた理由の主なものです。理由としては、新潟が好き、出かけてくると毎回新潟は住みやすいと思う。居心地がいい、環境がいい。今日の話聞いて、戻りたいと思った。戻りたくないという理由では、本当に魅力なのか分からない。やりたいことが新潟にはない。新潟にこだわることはない、視野が狭くなる。まだ決めていないでは、ほかの都市での暮らしが自分に合っているかどうか分からないから。新潟に戻りたいが、進学で県外に出たときに就活がうまくいくのか心配。進学は県外だが、子育ては新潟市でゆっくりしたい。などの理由が挙げられています。

次のページをお願いします。⑤今後、市外出身の友人に新潟市の魅力を伝えることができるかについては、出来るが65パーセント、分からないが34パーセント、出来ないが1パーセントでした。それぞれの理由の主なものとして、出来ると答えた方では、今回の講演で自分も知らなかった新潟の魅力を知ることができたから。食べ物がおいしいから。新潟市は住みやすく好きだから。分からないでは、まだまだ新潟市について知らないことが多いと思ったから。新潟生まれ

でないため、どうしても比べてしまうから。私自身お米が美味しい事以外、魅力を感じないから。改めて考える機会がなかったなどでした。出来ない理由として、魅力的な魅力がないなどの答えでした。

隣のページをお願いします。6番目として、同世代の友人に伝えたい新潟市の魅力はということ、12個の選択の中から複数の選択で答えていただいた結果です。一番多かったのが、やはり食べ物がおいしいということです。そのほか、自然が豊か、安心・安全、生活が便利、人がやさしい、子育てがしやすいというような意見もありました。7番の自由記述です。主なものをあげています。今までは他県の人と交流があるときは新潟には魅力がないと伝えてしまっていたが、今後は自ら発信していけたらと思った。今まで知らなかった新潟の魅力を知ることができてよかった。改めて新潟って良いところだなあと思った。新潟が良い所であることがよく分かった。県外での就活で希望の職に就けるかが一番心配。他の町で暮らしたことがないので、まだ新潟のよさがいまいちよく分からないが、多分年をとってから帰ってくる気がする、というような意見がありました。

最後のページになります。今回、高校3年生への講演を実施して、高校生の意見として、新潟市の魅力を知ることができた、魅力を発信していきたいという意見が多く見られ、新潟市の魅力が知られていないこと、新潟市の魅力を伝えていくことが大切ということが分かりました。これらのことから、今後の課題として、取組みの継続と対象の拡大の二つがあると思います。

今回のような講演など、新潟市の魅力に気づいてもらうきっかけとなる場を作って、継続して取り組むことが、若者の新潟市に対する愛着や市民の意識の醸成にもつながっていきます。継続にあたって、今回は高校3年生の年代の生徒に講演を行いました。今後の人生を設計していくうえで、どのタイミングで伝えていくのがいいか、学年や時期などを考えていく必要があると思います。

また、対象の拡大という点においては、市内の多くの高校生や、高校生へと成長する過程の中学生、小学生など、未来を担う子どもたちにも新潟市のことを好きになってもらえるよう、私たち大人がかかわっていくことが大切だと考えます。

ありがとうございました。

今の二つの発表に関連して、何かご発言ございますか。

最初の資料3で説明していただいた、にいがたへの愛着を

○市 長

○齋藤委員

育む教育についてなのですけれども、今年度から、アクション事業推進校でいろいろなテーマで行っていくという説明がありました。申し訳ないですが、これは具体的にどういう時間でやっているのですか。例えば、学校の授業でやっているのですか。あるいは土日でやっているのですか。

○学校支援課長

基本的には、総合的な学習の時間で、授業の時間を使ってやってもらっています。土日は使っていないと思われれます。

○齋藤委員

総合学習の時間は週にどのくらいの割合であるのですか。

○学校支援課長

週でいうと2時間程度です。しかし、まとめ取りという形を取っていますので、この週はこういう活動をまとめてやりたいということで、週6時間とか10時間という時間を作って、その中で活動することができます。

○市 長

それは割と融通が利くわけですね。

○学校支援課長

はい。融通が利きます。

○齋藤委員

あと、内容については、こういった形で提案が出てくるのですか。学校の提案なのか、あるいは周りからの提案とか、どうのように。素晴らしい提案ばかりなのですけれども、来年度以降、もっと多くの学校で行われるのではないかと思います。

○学校支援課長

その学校の地域の方々からこういうものがあるという紹介があったり、例示してある笹川邸のように、題材がすでに有名ですので、それを題材にしようと、先生方が提案したりというように、どちらもあります。古町スイーツのような場合は、古町の商店街の方からの提案もあり、それを学校側で受けたという形で、両方で組み立てていったということです。

○市 長

新潟小学校、古町というのは継続してやっていますよね。

○学校支援課長

はい。これについては継続してやっています。

○市 長

地域教育コーディネーターのかかわりはどうですか、この部分では。

○学校支援課長

商店街とかかわる中で、新たに店を開拓するときには地域教育コーディネーターの方々からも協力をいただいています。

○齋藤委員

本当にいい取り組みであって、今年度からこれはスタートしましたが、これは最初の議題にもなっている地域と学校の連携という中の一つだと思っています。来年度以降、いっぺんには無理かもしれないけれども、すべての小中学校で、何かしらこういうテーマを見つけて進めていくということが、先ほどの資料4の説明にも、新潟の魅力というところにもまたつながってくるものだと思うのです。

市長が先ほどおっしゃった、復刻版ですか、そういう形で、

こんな言い方は失礼かもしれませんが、教職員の人たちも地元を勉強していただいて、こういうことを伝えたいという発想を持っていただくのに、本当にいい、まだ拝見していませんけれども、素晴らしい本ではないかと思っています。

○市 長

私も驚いたのですが、これは昭和7年に出版されているのですけれども、明治12年から、植えた松の苗は141万本、90ヘクタール。すごいことをやって、それをまたこういう記録に残してもらえると、とてもいいなと思います。

○沢野委員

区のミーティングなどに入らせていただいて、本当に学校と地域の近さ、密着度というか、とても地域の方々も学校を応援してくれて、子どもたちを本当に一緒に育てているなという感じがとてもします。ウェルカム参観日などもとてもいいことだと思います。そのような中で、地域を知ることが、ひいては先ほどの、何年生になったら新潟のよさを知らせようかみたいな部分にずっと引き継いでいくのだらうと思うのです。本当にこの自分たちの地域を知るところから、ひいては新潟市を好きになる、知ることだと思うので、とてもいい事業だと思います。ぜひ、アクション事業、全部の、より多くの学校でやっていただけたらいいのではないかと思います。

○伊藤委員

先ほどの齋藤委員の意見に関連してですが、このアクション事業で、最後に課長からご説明がありました、にいがたきらっと発見ブックが作られるというお話でした。資料4でご説明いただいた中で、4ページ、高校3年生の人に新潟の魅力が伝えられるかと聞いたら、34パーセントが分からない、また出来ないが1パーセントなので、35パーセントの高校3年生が魅力を伝えることができるかまだ分からないというお答えでした。そういうときに、そのものではないにしても、例えばにいがたきらっと発見ブックなど、魅力について学んだ小中学生の活動が分かるような記事が載っている、何を伝えたらいいかが分かる冊子があったら、高校3年生もこういうものがあるよと活用できるのではないのでしょうか。新潟カルタではないですけど、上毛カルタのように新しく創作するような取組みがあってもいいかもしれませんが、新潟の魅力がよく分かるようになったというアンケート結果も数が思った以上に出ていたので、何を伝えると魅力が伝わるかという、伝えるべきものを具体的に用意することも、活用したらいいのではないかと思います。

○市 長

にいがたきらっと発見ブック、どのような形でまとまるか、楽しみですね。

○齋藤委員

今の伊藤委員のご意見に関連して、お願いというか、希望なのですけれども、にいがたきらっと発見ブックです。私の体験から考えてみても、私は新潟に生まれ、新潟で高校生まで生活し、そのあとほかのところで生活して、10年ほど前に新潟に戻ってきたのです。自分の地域ですっと小中高と住んでいるときは、新潟の魅力は周りからいくらいわれても、そこしか知らない部分があるわけです。外へ出て新潟を見たときに、ああ、枝豆おいしいんだとか、米がおいしいんだとか、そういうことが初めて分かるわけです。食べ物だけではなくて、新潟のよさというのは、私たちの世代になると客観的に見ることはできるのですが、このにいがたきらっと発見ブックに、数字的なものでもいいし、何か子どもたちが他と比較してこんな数字があるとか、全国でここだけなんだねとか、そういったものを工夫して入れていただければいいかなと思います。

○藤田委員

私は、この大好きにいがた体験事業と、新潟、選ばれています！というキャッチがとても好きです。にいがた大好きではなくて、大好きにいがたというところで、とても愛着がわきます。今回の資料が、私は個人的にはとても好きです。しかし、この資料を目にするのはそう多くの人たちではないと思うのです。それで、先回、講演会で見せていただいたビデオですが、とてもよくできていたと思います。そういうものをJRの待合室とかそういうところに年中流してもらって、選ばれています、新潟という、やはり人は振り向きましますし、学生もJRを利用するので、新潟のよさを、1日ずっとでなくても、年中、人が立ち止まる場所、人が集まる場所、役所でもこういうものを流していただければ、一般市民の人たちの目にも触れて興味を持ってくださると思います。

あと、先ほどの話題に戻って申し訳ないのですが、いろいろな人から事業に参加してもらうために、地域教育コーディネーターたちが婦人会や民生委員などのいろいろな総会に出向いて、自分たちの学校のPRをして、足を運ばないとなかなか来てくれないし、興味も示してもらえないのですが、そういう目につくところで様々な広報の仕方があると思うのです。資料をそのまま眠らせるのはもったいないので、大好きにいがたアクション事業推進校の事業実施内容は学校にビデオ化してもらって、玄関で放映し、各学校でいろいろなことをやっているということが、毎日否応なしに目に入るような仕組みを作っていただきたいし、とにかく広報をして、市政に無関心な人をいかに振り向かせるにはどうしたらいいかを

考えてもいただきたい。私は今回いただいた大好きにいがた体験事業と新潟、選ばれています！というキャッチがとても好きなので、そういう一言で振り向かせるようなやり方を考えていただけたらと思っています。

○市 長

そういう動きに詳しい、部長はどうでしょうか。

○地域・魅力創造部長

ありがとうございます。ぜひ、露出をもっとしていきたいと思えます。今までは、今の課もそうですが、少し自信のなさもありましたけれども、今ほどご意見いただいて、自信を持ってもっと出していきたいと思っています。ありがとうございます。

○市 長

こういう素材も随分集まってきたし、また、映像を作ったものもかなり多彩になってきたので、どんどん、人が大勢集まるところ、まずは地元だけれども、東京方面では大宮駅はやりましたか。

○地域・魅力創造部長

大宮駅、ちょうど昨日の地元紙の中で報道されていましたが、大宮駅のデジタルサイネージというのがありまして、ちょうど昼間、若者たちが活動するような時間帯に、15秒スポットですが、繰り返し繰り返し、大宮から新潟まで70分ですよとやっておいて、季節に応じて、祭りがありますとか秋がいいですとか、そんなことを組み合わせて広報していこうということで始めました。

○市 長

地元と、それから主に首都圏ということになるのでしょうかけれども、地元以外のアピールと、その両方大事だし。学校も、そういう面では、自分たちの学校がこういう面白いこと、いいことをやっているというのも、それも地域の人たちにどんどん伝えていくというのはまた大事ですね。

○藤田委員

足を運ぶと興味を示してもらえるので、これからコーディネーターの仕事はそちらのほうに転換していったらいいのではないかと。もう拡大から持続という方向性になったので、ボランティアリーダーみたいなものができていると思います。お任せしても皆さんできるので、コーディネーターはもっと別の動きを今度はなさっていったらいいのではないかと私は感じています。

○齋藤委員

大宮駅の広報活動というのは、予算的には。

○地域・魅力創造部長

掲載料無料で、コラボレーション、つまり、企業が持っているものでいかがでしょうかと。

○市 長

企業との連携という。

○地域・魅力創造部長

ただ、もちろん、コンテンツ作成料はかかります。

○上田委員

大好きにいがた体験事業について、6ページに書いてある

中之口西小学校の小林研業の例もありますが、今後またいろいろな企業に生徒の皆さんは行かれると思います。私も実は企業をやっています、体験学習ということで、中学生、高校生をお迎えすることもあります。今、高校3年生の娘が中学3年生のときに、秋葉区の地元のパン屋で工場体験をしまして、担当者から好きな絵を描いてごらんと言われました。そして、好きな絵を描いたら、そのパンを作ってくれて、店頭に出して金津中学校の何々さんが出しましたという宣伝もしてくれました。これはすごいなと思って。そういうちょっとした工夫を子どもたちはとても喜び、パン屋さんになりたいとかそういう夢も膨らむ、ということがありました。それもあって、うちはガラスの加工をしているのですが、自分が中学生、高校生をお迎えするときには、だれかのために、例えばお母さんのためにとか、作品を作って持って帰ってもらう。体験学習の最後の日にはそういうことをしています。

今、学校ではお願いするだけで精一杯だと思うのですが、企業側にもいろいろな趣旨を理解していただくということも、今後は大切になってくるのかなと思います。新潟が選択されるためには魅力のある町へ、総合戦略、市民、民間の取組みということもここには書いてあります。民間でも会社を経営していると、人が少なくなってくるというのが、やはり経営にはマイナスになってくることだと思うので、そういったところは、同じ目的があるから、学校からこの内容を講演してくださいと、商工会とか青年会議所などに趣旨等を伝えてもらうことを考えてもいいかなと思いました。

○市 長

そうですね。今、三条・燕で工場（こうば）の祭典、そこに新潟市の西蒲区、南区の方々も加えてもらったりして、人に見てもらおうというのは、やはり職人の誇りになったり、けっこう面白い効果が出ていて、最近のコウバのコウが耕す場の方が、勝手に参入してやってくる。そういうものと連携できるところはどんどん連携してもらって、それをまた教育、学校で。やはり、説明するとかそういうものが、やっていると慣れてきますので、そういう能力も学校で活用させてもらえると、両方いいかなという感じです。

○吉村委員

ほとんど言い尽くされましたが、一言だけ。私は数年かけてこういうものの整理と企画がとても進んだなという気がします。例えば、テレビを見ている、新潟市内のニュースとかそういうものも出ているし、これは行政側からの働きかけだなというものが出てきているので、非常によいことだと思うのです。話をまとめてしまうようで悪いのですが、基本的

に、今日の1番目の議題であります、愛着を育む、育てるといふのは、要は体験しないと愛着が生まれてこないもので、新潟でいろいろなことを子どもたちに条件を整えてあげる、そこから将来の愛が生まれてくるということで、非常に喜んで見ているという状況です。

例えば、市役所一つにしても各課でそれぞれ頑張っているけれども、調整というのか、そういうことも大事にしていかなないと、現場の端のほうへ行くと三つも四つも事業が降ってきて、どれをどうやって選べばいいのか、どういう筋合いなのか分からないという状況になってしまう。例えば、こういう会議のように、事業をやることだけ勧めるのではなく、各事業が常にどういう関連なのか、整理するような場、こういうものがこれから一層大事になってくるかなど。少しまとまりませんが、そのようなことを思っていました。

○市 長

市長部局では、一応、地域・魅力創造部長が企画調整という機能がありますが、役割を果たしていますね。

○地域・魅力創造部長

能力があるかどうかはあれですけれども。

○市 長

教育委員会はそういうものはどうなのですか。

○長浜教育次長

基本的には、教育総務課が教育委員会内の全体の取りまとめ課になると思います。企画調整課みたいな名称とか、分掌事務がきちんと書いてあるわけではないので、教育委員会の組織のあり方という面では、今後の課題と感じているところです。

○市 長

よく、コミュニティ協議会とか、教育委員会もそうだけれども、あちこちからいろいろなお願いが来て、あるいはアンケートが来て、まとめてやってくださいという。そういうものは未だに聞きます。

次に進ませていただきます。議題2の18歳選挙権の実施にあたってです。このたびの参議院議員選挙では、選挙権年齢がご承知のとおり18歳以上ということで引き下げられた初めての選挙となりました。これまで、学校においては主権者教育などに取組んできているわけですが、その取組みなどについて、教育委員会から説明をお願いします。

○学校支援課長

学校支援課です。18歳の選挙権の実施にあたって～新潟市の主権者教育～ということで、ご説明させていただきます。

資料5の1ページ目をご覧ください。中学生、高校生に対する新潟市の主権者教育は二つの視点で推進しています。一つ目の視点は、左側にありますが、主権者として必要な知識を獲得させることです。これまでも学習してきました三権分

立や議会制民主主義、議会の仕組みとはたらき、選挙の仕組みと意味といった、主権者として必要な知識を社会や特別活動などの授業で実感を伴って獲得させるようにします。二つ目の視点は、主権者としての意識を高めることです。身の回りの出来事を「自分のこととして考える」力を育成するということになります。そのために、学校や地域のために自分の考えや行動が貢献したという実感を促すように、総合や特別活動や道徳などの授業を工夫します。

2ページ目をご覧ください。今ほどの二つの視点を踏まえて、単に知識を知る教育から、知識の意味を実感する教育を目指して、主権者意識を高める教育プログラムを作成しました。このプログラムは、これまでの生徒会活動や社会科・公民などを発展・充実させるプログラムです。また、中学校1年生から高校3年生までの学習活動のつながりを意識して作成されています。

中央にあります。主権者教育のねらいは二つあります。一つは、政治や選挙への関心を高め、政治的教養を豊かにすることです。二つ目は、国家や社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことです。それらを目的にして、このプログラムは作成されています。

続いて、3ページをご覧ください。今ほど説明しました具体的な姿として、例えば、社会科・公民ですと、身近な地域の問題を取り上げて、実際に実態調査等を行って、その後、アクティブ・ラーニング、友達と話し合いながら深めていくという活動を取り入れるということです。今までは、どちらかという教科書に頼って知識を伝えるだけ、知るだけというものが多かったのですが、実際に自分たちの足で稼いだり目で見たりして、友達とともに考えながらその内容を深めていく。要するに実感を伴った知識を獲得させたいというものです。

真ん中は特別活動になります。これは、すべての中学校、高等学校で行われておりますが、そこにありますように、生徒会総会を議会と同じような形、提案者がいて、正副議長がいる中で提案を受けて討論し合うという形式で開催する。あるいは、生徒会選挙を行う際に、これは選挙管理委員会から実際の投票箱や記載台を借りまして、模擬投票を兼ねて行うということを進めています。

それから三つ目が、総合的な学習の時間です。白南中学校のように自分たちが考えた地元貢献するプランを区長に提案し、そういうことで自分たちのことを自分たちで動かせる

のだということを実感します。あるいは南浜中学校が地元の方とともに北区の未来を考える会を実施します。このときには、北区長から北区の課題等を聞いたうえで、また、自分たちが身の回りで見ているものを基に、どうしていけばいいのかということを経験の方と考えることを大事にした総合学習を進めてもらいたいということで行っております。

4ページをご覧ください。市立高等学校の取組みになります。このたび、特に18歳選挙権の実施にあたって、すべての市立高等学校で選挙管理委員会を招いて、18歳選挙権にかかわる講演会を実施しました。また、総務省、文部科学省提供の資料を使って、今回の18歳選挙に向けた授業を行い、先ほどもお話ししたように生徒会総会や生徒会役員選挙を実施しました。また、主権者意識を高めるために実施している市立高校の取組みとしては、万代高校では、海外研修に行くのですが、その際、新潟のよさを英語で伝えるために、身近な地域について改めて学習をしています。また、明鏡高等学校では、生徒会が中心となって地域清掃隊として地域の清掃活動を実施するために参加生徒を募集し、それを実施することで身近な地域に貢献する経験を積んでいます。高志中等教育学校では、地域貢献活動として地域のごみ拾いを全校ボランティアで実施し、地元自治会の防災訓練にも生徒が参加しています。

以上のような学習活動が行われていますが、課題として上がってきたことは、やはり生徒の意識がどうしても身近なテストや大学受験、就職活動などに向かっているということもあって、なかなか主権者としての意識を高めるというところまでは至っていない様子がうかがわれるため、今後とも、さらにこれらのプログラムを基に中高の連携を意識して学習を積み重ねていくことが必要だととらえているところです。

○市長

ありがとうございました。

18歳選挙権に関連しまして、何かご発言、いかがでしょうか。

○伊藤委員

18歳、19歳が選挙をして、どのような投票率であったかという記事を見ましたら、せっかくもらった権利だから投じてみようというのではなく、大体私たち大人と同じ率だったとのこと。きちんと一生懸命行ってくださいと、高等学校で取組んでいただいたのですが、なかなか数字が思うように上がらないのだなど。今、課長がおっしゃったように身近なものに興味があるためなのだということが分かりました。

取組みの一つで給食のデザートについて、どれがいいか投票をして選ぶということを聞いたことがあります。給食のどれを食べたいか、自分で1票を投じることによって自分の好きなものが食べられるかもしれないということで、選挙の本来の意味を体験できる取組みを行っている学校もあると。いろいろ試行錯誤はありますが、投票は大事な権利ですので、投票することによって意見を伝えることができるということを丁寧に繰り返し伝えてほしいです。特に19歳の投票率がぐんと低かったということがとても気になりますので、逆にそこまでの年齢になるまでの主権者教育に期待したいと思います。

○吉村委員

非常に難しい議題だと自分では考えていたのですが、去年から全国的に文部科学省の通達も含めて、非常に厳しいスケジュールの中でこの主権者教育が進められたというのが現実で、それが今回の参院選に来たのだらうというのが一つです。そういう意味では、何かはつきりしないまま、しなければならなかった学校教育現場は大変だっただらうという気がします。そうすると、こんなものなのかなと。

今、委員の話にありましたが、19歳の率が悪かったというのは、19歳は主権者教育も含めてあまり対象になっていないとか、全くそれがされないまま権利だけ与えられた可能性が高いわけで、専門学校や大学や就職先で大人から勧められなかったというのも大きく左右しているのではないかという気がします。

この先ですが、今年は知事選もあるわけで、特に高校生を心配する中で、私の見方が間違っているかもしれませんが、学校教育において、やはり選挙については政治的中立が非常に引っかけ、あまり力を入れた指導はできないケースのほうが多かったのではないかと思います。仕組みなどは学ばせたけれど、選挙に対してとか政治の流れに対してどのように考えて、どう向けばいいかという教育をされてこなかった。そういうことを考えると、なかなか18歳、19歳の投票というのは難しいのだらうと。心が動かないと選挙にも出られない。結局は、失礼ながら今後に期待して、小中学校も含めて、主権者という意味をしっかりと分かるような学習をどのように充実させていくかということがとても気がかりであり、難しいことなのだなと思っています。

○市長

18歳と19歳でだいぶ投票率が違ったと。18歳は教育委員会の手が及ぶ範囲で、19歳については大学も専門学校も頑張ったかもしれないのですが、就職されている方はだれ

が教育したのでしょうかとなると、なかなか手が届かないと。そういう面では18歳のほうがよかったというのは、教育委員会がそれなりに頑張ったということになるのかもしれませんが、高島教育次長、どのような総括をされていますか。

○高島教育次長

確かに、吉村委員が言われたとおり、今までも当然、政治的教養ということで、政治経済の時間の中で三権分立を教えてきたのですが、昨年度末から本格的にこの主権者教育は高校でも意識して行っており、主権者として、自分の事として考えさせるというのは、実質、昨年度の後半から取組んだと言っていると思います。そういう中で、市立3校では市の選挙管理委員会の方を招いての講演を実施し、あるいは高志中等教育学校は模擬投票などもやりましたし、そういった面での主権者意識を高める努力というか取組みはそれぞれの学校でやってきたと思います。それにより、一定の成果はあったと思うのですが、先ほど課長も言ったとおり、今後はいかにして自分が主権者として動かなければならないかという、自発的な感覚といいますか意識といいますか、それを身に付けさせるということがこれからの取組むべき課題であると考えています。

○市 長

全国的には、政治活動を高校生がする場合、どう対応するかというのがけっこう議論になり、愛媛県のように届け出制にするのだと打ち出したら、それはやり過ぎではないかというようなことがあって、新潟市の場合は、それぞれの学校に判断をゆだねるということでやっているわけですが、実際には、今は政治活動に参加する生徒もいない状況という感じなのですか。

○高島教育次長

当然、学校の中での政治活動は政治的中立確保で禁止ですが、例えば、放課後や休日、学校外での政治活動は認められています。現時点で、子どもたちがそういったことをしたという特に目立った例は学校にも報告がないし、学校から我々のほうにも報告は来ていませんので、あまりそういうことはなかったのかなという印象を持っています。

○吉村委員

表現ですが、校長裁量によるとか校長先生の判断にゆだねるという表現しかできないものですか。

○高島教育次長

基本的に、学校外での活動ということですから、家庭における責任で、保護者の監督のもとで政治活動をするということになりますが、そうはいつでも学校によってそれぞれ地域性もありますし、学校に通ってくる生徒も多様ですから、政治的活動で少し心配だなという学校も中にはあれば、学校外で活動するときは、例えば、届け出をしなさいというところ

もあるかもしれません。その心配はあまりないという学校であれば、特にそういうことはしないと。それはやはり学校の判断という、生徒の実態を踏まえるということになってくると思います。

○吉村委員

個人的には政治的活動はないのではないかという思いが先に走るわけですが、いざ、昭和40年ごろの学生運動時代を考えると、市立3校の校長先生は大変だなと思っています。陰で助けるような、相談に十分乗るような体制を校長先生には伝えておかないと、気の毒だなという気持ちもあります。

○高島教育次長

もちろん、教育委員会も丸投げではなくて、それぞれの学校の状況をよく聞いたところ、学校のほうで校長判断ということにしたのですが、必要な際には、当然支援するというスタンスで臨んでいます。

○市 長

当面、今の状況があるので、学校長、学校に任せるということで、私もそれ以上指示をする環境にないかなと思っていますが、やはり、昔の大変な、全共闘が高校に降りてきたという、あのころを知っている方々にしてみると、それは新潟市として無責任ではないかといわれることも今後考えらえるので、これについては、現場の状況、環境をよく見定めて、教育委員会と市立高校がしっかり連携してもらおうということで、当面は今の形でやらせていただきたいと思っていますが、これがベストかといわれれば、どうかなという。

○齋藤委員

基本的な確認なのですが、今、校長の判断ということで今年はいかれるようですが、では、各学校の校長先生によって、何か外で政治活動するときには届けを出しなさいという判断もオーケー、届け出を出さなくてもいいという判断もオーケーという解釈でよろしいですか。

○高島教育次長

はい、そうです。

○吉村委員

市立高校の校長先生方がよく横の連携をとることくらいは指導してもいいのではないのでしょうか。

○高島教育次長

もちろん、そうです。

○市 長

個々に判断だといっても、あくまでも市立高校として情報を共有しながら、ばらばらに判断するというのではなく、連携して対応していくという形でしょうか。

○高島教育次長

そうですね。三つの学校がよくまとまって、このケースはこう、そのケースはこうと、様々なケースを想定しつつ、連携を保ちながら対応するということが今回もやっていきますし、今後も同様に進めていきたいと考えております。

○市 長

ありがとうございました。

あと、議題3、その他も含めて、皆様から何か発言があれ

ばお願いしたいと思います。

よろしいですか。先ほどの資料5の3ページ目に、南区は白南中学校の生徒から、何かまちづくりの提案はないかということいろいろ出してもらって、その中で、ウォーターシャトルの乗船体験を大風合戦の時期にどうだろうという提案が一つ採択されて、実現したと。これはやはり、全部実現しなかったということだと、せっかく提案したのにといい心情になります。かなりハードルが高そうなウォーターシャトルを大風合戦の観戦にという提案を実現させたというのは、これはなかなか大きいことだったのではないかと。やはり子どもたちに夢を描かせるだけではなくて、その夢のいくつかは地域と一緒にできれば実現していくのだと、未来は自分たちで選択できる、作り出せるのだということを実感してもらおうというのもとても大事なかなと思っております。

○織田委員

ありがとうございます。先ほど手を上げて言おうかどうか迷っていた点でした。地元の子どもたちはとても喜んでおります。まさに市長がおっしゃったとおりで、自分たちが考えたことが実現するのだという、その可能性を実感できたことは子どもたちにとって非常に大きいと思います。それこそが大きな主権者教育だったと思います。これから子どもたちが成長して行って、いざ選挙権を手にしたときにそれが生きてくる、大きな一歩だったと感じております。

○伊藤委員

大好きにいがた体験事業の中で、私の地域でもアクション事業推進校としてスイーツ開発などに学校が取り組んでいまして、さつまいもの名前をつけるコンテストに応募していました。やはり子どもたちにとっても、実際に選んだ名前が地域の産物の名前になる、つまり、学習したことがやがては地域の農業や産業につながるというのは非常に魅力がありますし、学習したことがずっと残るといえるのでしょうか、地域の品種のブランド名になるというのは非常に夢のある取組みだと思えました。

先日、テレビに市長も出られて、新潟小学校の学習発表ということで、子どもたちが地域の魅力に触れて学んで、古町スイーツという新しい古町地域の魅力を作り出したとのお話をお聞きしました。かかわった大人たちもエネルギーをもらい、子どもたちにもできるなら自分もということで、新潟に住んでいる一人一人が新しい魅力に触れたり作り出したりというきっかけになるのではないかと思います。総合学習の発表の場というのは非常に可能性や夢が詰まっているものだと実感しました。市長も一生懸命新潟の魅力を発信しますと

テレビでお話しされていますが、その力になる一つ、子どもたちの夢とか学習による取組みがやはりキーワードになるかなと思います。今、総合学習や大好きにいがた体験事業を行っている子どもたちが、高校3年生になったときに新潟の魅力を他県の人に教えられますかと聞かれたら、100パーセントの人が私は伝えられますという結果になるのではないかと期待しています。

○市 長

ありがとうございます。資料3の2ページ目のアクション事業推進校と主なテーマですが、これを見ているだけでも本当に楽しくなってきます。参加型もあり、郷土の伝統芸能、いざや神楽みたいなものを知っていく、それから郷土の偉人、明和義人とか馬堀用水、そして伊藤五郎左衛門。地域にこんな偉人がいたのだということをきちんと知っていく。そして鳥屋野潟、じゅんさい池など、地域の自然資源。これに触れていくと。鮭と新津川とかもそうでしょう。こういう多彩なものが、最終的にはにいがたきらっと発見ブックになってもらおうと、すごい新潟の財産になり、これを繰り返しやっていると、本当に新潟で自慢するものが私は思いつきませんという高校生はいなくなるというくらいになっていくのではないかと。今、いろいろなところで新潟自慢がされていて、Negiccوとさちっこのにいがた自慢ソングもそうとうアクセスしてもらっているし、ああいうものも含めて、繰り返し人が集まるところで流していくと、けっこう喜んでもらえる素材、映像的な素材もできましたので、どんどん活用していく、学校も含めてということで、新潟の自慢するものは大いに自慢すると。それも狭いお国自慢にならないようにするというのでやっていきたいと思います。

あとはどうでしょうか。教育長、最後に締め言葉。

○教育長

それこそ今のご大好きにいがた体験事業も古町スイーツで自分たちが提案したものが作られるとか、デザート選挙でも白南中学校の例でもそうですけれども、そうやってこの地域とかかわり合いながら自分たちの思いとか考えたことが、小さいことでも少しずつ実現できるのだという体験を積み重ねるのが、主権者教育にもつながると思いますので、引き続き頑張っていきたいと思います。

○市 長

それでは、今日は大変ありがとうございました。またこれからもよろしく願いいたします。ありがとうございました。

### 第3 次回日程

○事務局（地域・魅力創造部長）

本日は、大変長時間にわたりまして活発なご議論をいただきまして、ありがとうございました。次回の会議につきまし

ては、教育委員会事務局を通じて調整させていただきまして、ご連絡させていただきます。

#### 第4 閉会

○事務局（地域・魅力創造部長） これをもちまして、平成28年度第1回総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。